

自律社会とは、オートポイエーシスの社会的な社会ではないか。そういう予感から、本冊子を作り始めた。しかし、「オートポイエーシスは難解だ」「オートポイエーシスなんて、哲学の話だろう」と、とかく言われている。よって、私たちが想定したい読者、「未来志向のエンジニア」の方々に、いかに理解していただくかが編集上の最大の課題であった。しかし、本冊子の中心的コメントータである河本英夫氏が、長年の研究成果を、とても分かりやすく語っていただいたことにより、かなり私たちの身近な感覚につながるのがあることだと感じられるようになったのではないだろうか。オートポイエーシスは、その原理論こそ分かりづらい。しかし人間の本性的なメカニズムに近い思想だからこそ、じつはその応用は、私たちの感性にとっても分かりやすく、馴染みのいい方法論であるといえるかもしれないのだ。

「はじめに」のイントロダクションや、河本氏の語り下ろしによって、オートポイエーシスというシステム思想の輪郭が分かってくることによって、他の2人のコメントータの方々、美馬のゆり氏、原田昭氏の言わんとするメッセージの意味やポジションもまた、より明晰に浮かび上がってくるように思われたが、いかがだったであろうか。

●
本冊子を編纂して、ゆっくりと穏やかにだが、確実に何か新しい変化が起きつつあるという感覚を確認できたように思う。それはどうやら、私たちの外側の社会や世界の変化ではなくて、内面の感受性のようなものの変化である。何か新しい外側からの刺激によるというよりも、太

古の昔から私たち人間の深奥部に潜んでいる根源的な感受性のようなものが、自己と世界とのインタフェースにじんわりと滲み出てきて、ときに鋭敏にときに鈍重に、世界を精査しはじめるときのような変化である。

何かこれまでとはまったく別の指標が、経済やイノベーションや学習において打ち立てられることになりそうだという予感もある。少し前に、日本の芸術や芸能やエンタテインメントの固有な魅力が、「ジャパン・クール」などといわれたが、それは、「寛容性」という日本の強みとどこか通底しているに違いない。考えてみれば、古来、日本文化は、海外の文化を寛容に受け入れ、咀嚼し、日本固有のものを創造してきたともいわれてきた。それはどこかで、薄っぺらなキッチュと紙一重のリスクを孕んでいるものの、精妙なセンスによって、そのリスクを力にしてきたように思われる。日本的な「美」や「洒落」の感覚とは、河本氏が言うような、きわめて優れた触覚的センスにもとづく能力であったといえるかもしれない。そのような才能と、そこから生まれる知恵こそが、次世代産業群の競争優位の重要なファクターになるだろう。

人間の内なる変化への胎動は、どうやら新しい科学技術や社会システムによってその環境が整うのを、今か今かと待ち受けている。求められているのは、「機械中心」から「人間中心」へ、「自動的な効率性」から「恣意的な選択性」へ、「計画と意思決定」から「発想と自己表現」へのシフトである。その根底を支えるものが、どうやら第3世代のシステム思想、オートポイエーシス、あるいはまたポスト・サイバネティクスのものである。

オートポイエーシス的な自律社会を支える科学技術とは、どのようなものだろうか。その答えは今、まさに準備されつつあるのだろう。自律社会と科学技術の関係性を探る本シリーズの課題は、その動向と実体を、これからもしっかりと見きわめていくことであると考えている。